

## 『隋書』倭国伝から倭国の領域を明らかにする

榛葉順一

はじめに

『日本書紀』推古紀と『隋書』倭国伝との外交記事のくい違いは古代史の難問といえる。古田武彦氏は『隋書』倭国伝で描かれる「倭国」は九州に都する国で、近畿天皇家ではないと論じてきた。しかし、一般には『隋書』倭国伝の裴清の来訪した場所は当然近畿であるとされ、「魏志倭人伝」のような九州か近畿かを問うさかんな議論はなかった。それは隋代の外交関係の記録は『日本書紀』推古紀に小野妹子の外交記事があり、そこでは遣使裴世清が到達した場所は「難波津」とあり、現在の大阪に到着した記録とみなされているからである。こうして、『隋書』の裴清はあたかも大阪の難波津に泊まったかのように理解されてきた。

しかし、『隋書』倭国伝では大阪の「難波津」を彷彿とさせる地名が一切ない。ここでは、『隋書』倭国伝冒頭の地理表記や裴清の行路記事などを読み解き、『隋書』の記す「倭国」の所在地は九州島であることを明らかにしたい。

### 一 『隋書』倭国伝の記述

『隋書』倭国伝の冒頭に、その地理は以下のように記載される。

倭国は百済・新羅の東南にあり。水陸三千里、大海の中において、山島に依って居る。魏の時、訳を中国に通ずるもの三十余国、皆自ら王と称す。夷人里数を知らず、ただ計るに日を以てす。その国境は東西五月行、南北三月行にして、各々海に至る。その地勢は東高くして西下り、邪靡堆に都す、則ち『魏志』のいわゆる邪馬台なる者なり。古よりいう、「楽浪郡境および帯方郡を去ること並びに一万二千里にして、会稽の東にあり、儋耳と相近し」と。〔1〕

この「邪馬台」の地が『隋書』のいう「倭国」の都である。その記述に従えば、『三国志』魏志倭人伝以来、変わることなくある場所とされる。

1. 百済・新羅東南
2. 水陸三千里
3. 大海之中依山島
4. 魏時訳通中国。三十余国
5. 東西五月行、南北三月行、各至於海
6. 其地勢東高西下
7. 邪靡堆、魏志の邪馬台、楽浪・帯方郡より一万二千里

これらの記述が九州を中心とした領域を指すことは、古田武彦氏が著書『「邪馬台国」はなかった』などで何度も論証されたとおりである。ここでは検証を進めて、上記の7点はそのすべてがおおよそ九州島をさしていることを示していきたい。

再確認していこう。「百済・新羅の東南」の方向にあるのは九州島にほかならない。朝鮮半島から「水陸三千里」は対馬・壱岐をはさんで千里×3の距離であり、九州島までの距離がふさわしい。「大海中の山島」は九州島そのものである。「三十余国」は魏志倭人伝の記述する国々であり、九州はゆるがない。「東西五月行、南北三月行」は「各々海に至る」ところから、九州島の広さに関する新情報と考えられる。「其地勢東高西下」の「其の」は「倭国」であり、「東高西下」の地勢こそまさに九州島が当てはまる。そして最後に楽浪郡・帯方郡から「一万二千里」で到達する場所は確実に九州島を示しているのである。それが「漢の光武の時」の「倭奴国」以来、魏代の「卑弥呼」、「斉・梁に至り」代々中国と変わらず通じてきた国だと、その一貫性を『隋書』倭国伝は記しているであった。このように、近畿地方や中部地方を含む日本列島の広い領域をさすものではなく、すべてが九州島をさす記述と考えられるのであった。

## 二 東西五月行、南北三月行

一般に、「その国境は東西五月行、南北三月行にして、各々海に至る。」の内容は、日本列島の広い領域を指すものと考えられてきた。また、古田武彦氏も『失われた九州王朝』で、「東西五月行」を九州だけにとどまるものではなく、「四国から本州につながる日本列島全体を指していることはいままでもない。」とし、「南北三月行」も対馬から奄美諸島・沖縄諸島を「南北に縦貫する線を言っている」と考えた。[2]

こうした議論に対して、ほとんど目立った議論はないが、増村宏氏は「五月行・三月行」が『旧唐書』倭国伝にも同じ月数をあげていることから「大海中にある倭國本島の大きさを示す数字とした。[3]これは、『旧唐書』日本国伝の「東西南北、各数千里」「西界南界、咸至大海、東界北界、有大山為限」の大きさと理解したことによる。『旧唐書』倭国伝・日本国伝の地理表記をあらかじめ同一視して、後の唐代の「日本国」の領域表記から隋代の「倭国（倭国）」の大きさを推し量っているのである。

こうして、この「東西五月行、南北三月行」という表記は、天子を自称する「倭国」が広く影響力を及ぼす地域とされたり、八世紀の「日本国」の領域と同一視されたりしてきた。では『隋書』のいう「月行」とはどのような距離なのか。既に見たように「東西五月行、南北三月行」は「『魏志』のいわゆる邪馬台」を、『隋書』の新情報でそれと同じ領域を言い換えているかにみえる。ではこの「東西五月行・南北三月行」とはどのくらいの領域をさすものなのか。

## 三 『隋書』の「月行」の示す距離

『隋書』四夷蛮伝では下の表のとおり、諸国の支配領域の広さをあらわすため、東西と南北の距離が記載されている。東夷伝、南蛮伝の諸国ではその支配領域がよく示されているが、23国が記載される西域伝はその一部にだけにとどまり、北狄伝にいたっては記述がない。

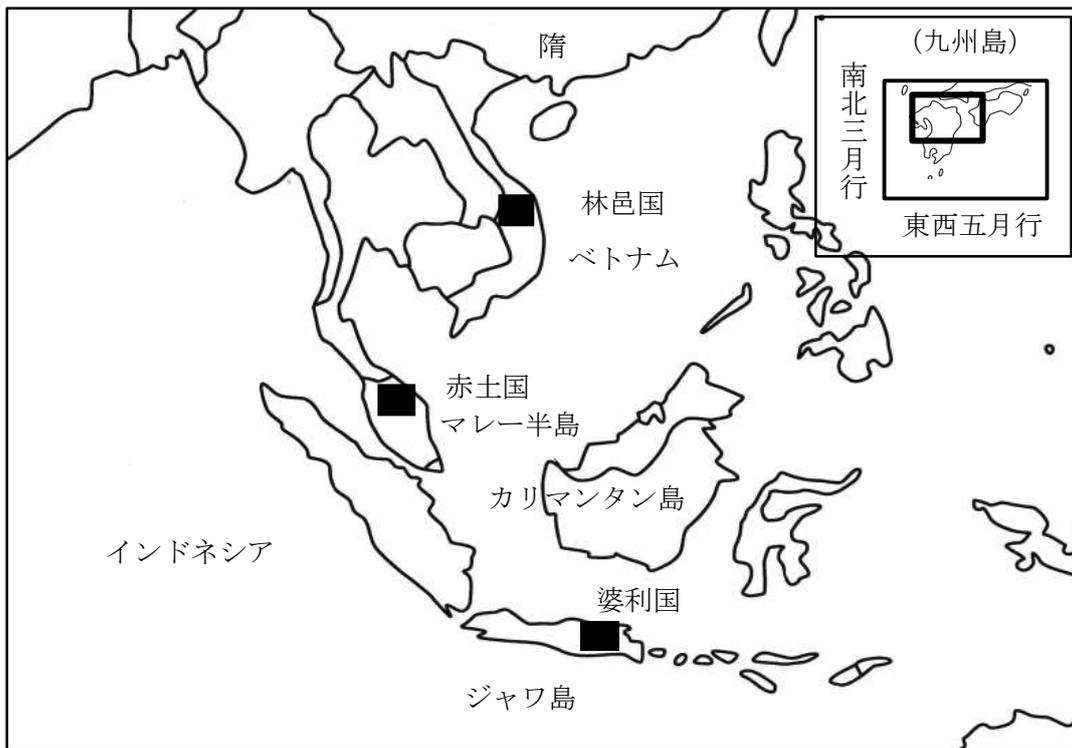
列伝	国名 [4]	国土の大きさ
東夷伝	高麗	其国東西二千里、南北千余里
	百濟	其国東西四百五十里、南北九百余里
	髀牟羅	南北千余里、東西数百里
	倭国	其国境東西五月行、南北三月行
南蛮伝	林邑国	其国延袤数千里
	赤土国	地方数千里
	婆利国	国界東西四月行、南北四十五日行
西域伝	吐谷渾	(滅亡時参考) 東西四千里、南北二千里
	高昌	其境東西三百里、南北五百里
	附国	其国南北八百里、東南千五百里

この一覧表から重要なことがわかる。まずは、「東西・南北」は国々が支配する領域であること、次に、その領域はほとんどが里数で表示されるが、倭国伝のほかに唯一婆利国が「東西四月行、南北四十五日行」と「月行・日行」で記述されている。倭国伝の「月行」も「日行」の誤りとして、「東西五日行、南北三日行」などと軽々に改定することはできない。「月行」という確かな距離の単位があったと考えざるをえない。

では、その距離はどのようなものか。婆利国の領域の広さから推定してみたい。この婆利国は『梁書』にはじめて登場し「東西五十日行、南北二十日行」とある。次に『隋書』にあらわれ、後に『旧唐書』では「延袤数千里」とある。仮に婆利国が隋代と唐代において同じ広さだったとすれば、「東西四月行、南北四十五日行」は「延袤数千里」程度を指す広さとみなすことができる。さて、延袤とは、延は東西で横の長さ、袤は南北で縦の長さを表し、延袤は国土の広さをあらわす。では、この時代に縦横数千里の国にはどんな国があるか。『旧唐書』では婆利国、林邑国が「延袤数千里」とされる。また、『隋書』では林邑国「延袤数千里」、赤土国「方数千里」とある。隋代の林邑国、赤土国、唐代の林邑国、婆利国は同等の広さとみなされている。

では、それらの国々はどのような広さだったのだろうか。林邑国はベトナム中部、赤土国はマレー半島にあったとされる。そこに東西と南北が数千里の方形の領域があったという。この地形のなかに、どのような方形の領域があったのだろうか。西側に山脈が迫る細長い形をしたこの辺りの特徴から、東西の距離はおのずと限定され、100～150km程度と想定される。その方形の面積は10,000～22,500km<sup>2</sup>となる。さて、倭国の広さは5月行×3月行=15に対して、婆利国は4月行×1.5月行=6であり、倭国は婆利国の2.5倍になる。これは凡そ25,000～56,000km<sup>2</sup>である。九州島が37,000 km<sup>2</sup>であることから、九州島の2/3程度から1.5倍程度となり、山口・愛媛県を加えた程度の広さとなろう。こうして「東西五月行、南北三月行」の領域もおおよそ九州島に相当する広さを示すものだったと考えられる。

また、『隋書』百濟伝で舩牟羅国（済州島）への距離は「其(百済)の南に海行すること三月」とあり、これまで明らかな誤りとみなされてきた。しかし、泗泚（扶余）から南に海行「三月」の距離と九州島の南北「三月行」の地図上の距離はほぼ等しい。「海行三月」と「陸行三月」は海と陸の違いはあるが、同じ基準の「月行」距離と考えれば整合性のある距離とみられる。



(図1：隋書・旧唐書の方形数千里の想定領域。

林邑国（隋書、旧唐書）、赤土国（隋書）、婆利国（旧唐書）

#### 四 十万户の倭国

『隋書』の倭国が九州島であることを示唆するものとして、その戸数にも注目したい。『隋書』倭国伝には以下のように記載されている。

軍尼一百二十人有り。なお中国の牧宰のごとし。八十戸に一伊尼翼を置く。今の里長の如くなり。十伊尼翼は一軍尼に属す。

この独特な地方行政制度として百二十人が配置される「軍尼」の制があったといい、中国の地方長官である「牧宰」のようであったという。一人の「軍尼」に十人の「伊尼翼」が属し、一人の「伊尼翼」に八十戸が属するという。ここから倭国は  $(120 \times 10 \times 80 =)$  96,000 戸で構成される国であったことになる。これは別に「戸、十万ばかり」とも記載され、およそ10 万戸の国であることは疑いない。

さて、この十万户の国はこの時代ではどれほどの規模なのだろうか。『通典』によれば、統一国家隋の戸数は890 万戸というから大きい。朝鮮半島の国々では総章元年

(668) 高麗滅亡時の戸数が 697, 200 戸とある。倭国はその七分の一に過ぎず、かなり少ない戸数ともいえる。ひるがえって考えると『三国志』魏志倭人伝に、共立された女王の国・邪馬壹国の 7 万余戸に近い数字であることに気づく。このことから隋代の「倭国」は従来考えられているような日本列島の広い範囲に及ぶのではなく、あくまで九州島の国であったとみられる。

## 五 文林郎裴清の行路記事から考える

さらに裴清の行路記事を検証する。『隋書』倭国伝の行路記事は以下のようにある。

百済を度り、行きて竹島に至り、南に舂羅国を望み、都斯麻国を経、廻かに大海の中にあり。また東して一支国に至り、また竹斯国に至り、また東して秦王国に至る。

(中略) また十余国を経て海岸に達す。竹斯国より以東は、皆な倭に附庸す。

百済、竹島を経て、済州島である舂羅国があらわれ、対馬(都斯麻国)、壱岐(一支国)、筑紫(竹斯国)、秦王国とあらわれる。秦王国の位置を特定することはできないが、朝鮮半島から海峡を渡り九州島に到着する範囲の地名だけが現れている。また、「新羅・百済、皆倭を以て大国にして珍物多しとなし、並びにこれを敬仰し、恒に通使・往来す。」ともあり、朝鮮半島と九州との間の所在地に確かな地名が続くが、近畿地方と結びつく地名は一切ない。さらには「阿蘇山有り。その石、故なくして火起り…」と噴火をリアルに伝えるのも九州島に即した表現と言える。『隋書』からは近畿地方を訪ねたという痕跡を見つけることができない。従来、「十余国」は瀬戸内海の国々であることが説かれてきたが、これは『隋書』から得られたものではなく、推古紀の「難波津」を大阪と見立て、そこから連想した風景に過ぎなかった。しかも、『隋書』にはそのような地名の記載はない。古田武彦氏は『古代は輝いていたⅢ』で、「都斯麻(対馬)国、一支(壱岐)国、竹斯(筑紫)国の3つの国は現地名を示しており、多利思北孤の倭国は九州である。」と言われている。[5]

## 六 結び

『隋書』倭国伝には、後漢の一世紀から隋の時代の七世紀前半まで中国と相互に通じてきた国であると記載されている。その国の所在地は概ね九州島であった。『隋書』倭国伝の冒頭の地理表記に記載されている7つのキーワードは全て九州島を示している。特に「東西五月行、南北三月行」は、検証結果、古田武彦氏が考えた内容より狭い範囲の九州島であった。また、倭国の戸数からも九州島の領域がふさわしいと考える。そして、文林郎裴清の行路記事に記載されている地名からは、朝鮮半島から九州の間の地名が続く、瀬戸内海の国々や近畿地方の地名がないのであった。『隋書』倭国伝に記載されている内容は、九州島に都があった国の状況であり、倭王多利思北孤の外交記録も『日本書紀』推古紀が記す外交記録とは別の記録として検討することが求められる。

- [1] 石原道博編訳『新訂魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝・隋書倭国伝』中国正史日本伝（1）（岩波文庫）。国名の「倭」は原文のとおり「倭」とした。
- [2] 古田武彦『失われた九州王朝』（ミネルヴァ書房） p 269
- [3] 増村宏「倭国・日本国の所在と大きさ―続・旧新両唐書日本伝の理解」『鹿児島経大論集』巻19、1978-12、『遣唐使の研究』（1988年同朋舎）に収録。
- [4] 林邑国は現在のベトナムのクアンナム省（広南省）及びその周辺にあった国とされる。婆利国はインドネシアのカリマンタン島に、赤土国はマレー半島南部から西部ジャワあたりにあったとされる。
- [5] 古田武彦『古代は輝いていたⅢ』（ミネルヴァ書房） p 158